



Title	Richard Rolle of Hampole : The Form of Livingの語順について
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1971, 7, p. 37-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98986
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Richard Rolle of Hampole

The Form of Living の語順について

金 山 崇

§ 1 従来の Chaucer, Gesta Romanorum, Mandeville の散文における語順調査は大略14世紀後半以降の ME 中東部 (East-Midland) 方言についてであったが、今回は14世紀前半の北方方言について調べることにする。一般的に北方方言では他方言よりも早く屈折形式の消失が進み近代語的方向へ向ったと言われるだけに、統語法の面でも異なる点が見られえよう。これを語順について調べ、その特色を記述すると共に、転倒語順などの条件を探ろうという試みである。

Yorkshire 南部 Hampole の hermit と言われる Richard Rolle (c.1295-1349) はオースチン派の修道僧で mystic として特異な存在であったこと、その影響は国内に留らなかったこと、など文学史に詳述されているが、ここで取り上げるテキストは、Ego Dormio や Commandment of the Love of God と共に彼の文筆活動の最後に属すると言われる The Form of Living という約1万語から成る作品で、彼の弟子の Margaret Kirkby のために書いた epistle であると言われる。38の写本が残存しており、最良の二つは北方方言で書かれているもので、今回の対象としたのは、その一つ MS. Cbg. Univ. Lib. Dd. 5. 64 (c. 1400) で Hope Emily Allen, ed. : English Writings of Richard Rolle (Oxford, 1963)に収められているものである。この教訓的書簡は A.C. Baugh (p.228) によれば、上記の三つの中で 'most orderly and mature exposition of his views' であると言う。また、I.A. Gordon (p. 54) は 'Rolle's prose is essentially modern in sentence structure' と、G. A. Anderson (p. 194) はこの書簡を 'a prose tract highly poetic in tone' と評し、彼の文体や散文史

の中に占める位置について ‘In his prose style, Rolle is not far from the tradition first seen in Aelfric’s homilies ; he writes eloquently, with a goodly attention to rhetorical devices, including especially alliteration and antithesis. It is, however, a notably clear kind of prose: and the same is not true of most vernacular prose in the fourteenth century’ (p. 194) また ‘as a perpetuator of the prose tradition, especially in its more artistic forms, Richard Rolle is of truly valiant stature’ (p. 198) と言っている。

§ 2 このような意見を参考にして、調査をするが、21行の韻文は除外したこと、また副詞（句）などが頭位に来て、続いて句や節があるときは、従来の調査でもそうであったが、特殊な場合を除き転倒はしないから資料には含めなかったことを断っておきたい。

§ 3 命令文で主格が付随する場合は、必ず転倒語順である。

and *wite þou wele, þou synned in þat dede* (101-167)⁽¹⁾

その他89-149, 92-116, 97-7, 102-186, 111-98。

なお次のような例はセミコロンを重視すれば、先行の助動詞 *thar* との結びつきが稀薄になった命令文と考えることも可能であろう。

The thar noght tell all þe soth ay, bot if þow will ; bot al lees hate.
(100-135) cf. §10.

§ 4 勸奨文の1例でも転倒が見られる。

Begynne we at counsel (116-5)

A.C. Baugh : Literary History of England (Routledge & Kegan Paul), 1967.

I.A. Gordon : The Movement of English Prose (Longmans), 1966.

G.K. Anderson : Old and Middle English Literature (Collier Books), 1962.

(1) 括弧内の数はテキストの頁及び行数を表わす。

§ 5 このテキストでは、従来の調査結果と異なり、感嘆文での転倒は見られない。

And what wrechednes it es, to have þe name...! (88-111)/Ha! What
it es mykel, to be worthi lovyng, and be noght loved ! (88-109)

§ 6 疑問文では、疑問詞が主格の働きをする場合を除き、転倒語順となる。ただ、いわゆる文の一部をなす間接疑問節において、2例を除いて他は非転倒の語順になっていることは、従来の調査の結果と異なる。また現代口語にも見られる You did it? 式の非転倒語順による疑問文もあるが、下の例に見るように先行の文中の ask, tell との結びつきが本来の間接疑問節の場合に比べてやや弱いところの半間接疑問文（ないしは節）と呼んでもよいものであろう。ask, tell に続く場合にこの半間接疑問文（節）が多いことは従来の調査でも見られた。

A : How *may þou fynd* a synfuller wretche þan swilk ane ? (86-52)
/er we noght gretly at blame...? (87-79)

B : If þou will *aske* how gode *es he* or *scho*, *ask* how mykel *lufes he*
or *scho* (109-37)

C : we thynk how mykell þe *joy es* þat þai have (95-40)/For we
wate never when *we sal dye*, ne whare *we sal dye*, ne how *we sal*
dye, ne whider *we sall ga* when we er dede (95-22)/loke þen what
it es to fele (102-211)

その他 96-13, 102-213, 104-45, etc.

D : Bot now may þow *ask* me, and say : 'Þou spekes sa mykel of
lufe, *tel* me, what *es lufe* ? And whar *es lufe* ? And how *I sal lufe*
God verrayly ? And how þat *I may know* þat I lufe hym ? and in
what state *I may maste lufe* hym?' (108-21) cf. þe fifte *askyng* was :
In what state *men may maste lufe* God ? (115-247)

なおAの第2例の後半 *lufes he or scho* の語順は先行の *es he or scho* のその持つパタンにならったものとも考えられるし (cf. §7), 主語部分と動詞との釣合い上, 重い主語部分を後置して転倒語順としたとも言える。§12 でも述べるように, 転倒語順は, 修辭的配慮であろうか, 連鎖的に起こる場合があることも思い出されるのである。

§ 7 主格補語が文頭に來た場合, 主語が代名詞なら, 非転倒の, 名詞ならば転倒の, 語順となる。目的格補語の文頭に來る例は見出されなかった。

a foule *thyng it es to hafe lykyng and delite in mens wordes* (88-113)/If pou lufe hym mykel, mykel joy... þow feles... If þi lufe be not byrnand in hym, *litel es þi delite* (103-23)/*Inseparabel es þi lufe*, when al þi hart...es swa haly (105-18)

その他90-26 (代-自)⁽²⁾, 103-11(代-自), 109-26(自-名), 116-3(代-自)。

ただ次の例では主語が代名詞 (意味は a man or a woman で名詞に相当するが) であるが転倒している。これは, 主語部が動詞に比して重いこと, また *Loved be þou, keyng,/and thanked be þou, keyng,/and blyssed be þou, keyng* (104-30) といったこのテキスト中の韻文の部分にも見られる固定した語順の型にならったものと考えられること, 後続の形容詞節と結びつく都合また関係詞 *pat* を挟んだ左右の節相互間の均衡が考慮されている, といった点から見れば理解されよう。

Blyssed es he or scho pat es in pis degree. (105-15)

§ 8 従属節で主格補語が主語と動詞の間に挟まれる2例がある。この語順は動詞後位で, OEにも見られるものであり Chaucer にも2, 3散文中にある。韻文でも多く見られ, この場合やや不自然だが修辭的效果を意図したもの

(2) 括弧内は主語・動詞部分をそれぞれ代名詞, 名詞; 自動詞, 他動詞, 複合動詞と区分し, 略号を用いてある。

であるらしいことは汲みとれる。§ 30 で扱う副詞（句）の位置に共通したものがある。

Ane es: *pe mesur of pi lyf here, pat sa schort es, pat unnethis es it oght.* (95-18)/*speke til pi luf and to pi spows Jhesu Crist, pat hegh es in heven* (89-11) cf. *For he pat says he lufes God, and will noght do in dede pat in hym es to schew lufe, say hym pat he lyghes* (111-96) に見られる動詞後位の語順は近代英語にも *all that in you lies* などの文句に残っている。

§ 9 動詞の対格目的語が文頭に来る 32例の内 12例に転倒の語順が見られる。与格目的語の同様な例は見出せなかった。いま問題点となる部分を構成要素 (O=Object, Vt=Transitive Verb, Vi=Intransitive Verb, v=Auxiliary Verb, V=Main Verb, Pron=Pronoun Subject, N=Noun Subject) に分析して転倒・非転倒の区分によって表に示すと：

Non-Inversion	Inversion
O + Pron + Vt.....14	O + Vt + Pron2
O + N + Vt..... 1	O + Vt + N2
O + Pron + vVt ... 4	O + V + Pron + Vt...5
O + N + vVt ... 1	O + V + N + Vt...3

これで見ると、対格目的語が頭位に来たとき38%弱の転倒語順があること、単一動詞の場合、21% 強の転倒語順があり主語が代名詞なら圧倒的に (87% 強) 非転倒語順であり転倒しにくく、名詞の場合は66%でやや転倒に向うが大した差がない（ただし例文Aの第2例を参照）こと、複合動詞の場合、62%弱の転倒語順があり、主語が代名詞の場合55%強転倒に向うが大した差はなく、名詞の場合に75%で転倒にかなり大きく傾くこと、つまり動詞に関係なく言えば名詞主語で転倒に傾きやすいこと、また主語の別を度外視して単一動詞の場合は非転倒に、複合動詞ではより少ない程度だが（79%に対し62%）やや転倒

に向う、つまり複合動詞の方が転倒に傾きやすいこと、がわかる。

A : a thousand *wiles he has* on what maner he may desayve þam (85-31)/*Some he takes* with errour þat he puttes þam yn ; ...*Some þe devell deceyves* thurgh vayne glory. (86-42) この場合先行の文との明瞭な parallelism (対句法) を考慮に入れるべきであろう。/Bot many *ane þe devel hase deceyved* (92-118)/And many *þai may make* to erre (93-139)

その他90-35(代), 91-74(代), 91-84(代), 94-19(代), 95-31(代-複), 101-154(名-複), 103-20(代), 104-1(代-複), 108-14(代), 114-219(代), 114-221(代), 119-74(代), 119-74(代), 119-75(代)。

B : For a *thyng warne I þe* : (102-188)/A *thyng tel I þe* (106-74) これは Chaucer にも見られるもので一つの固定した語順と考えられる。/þis *gylder layes oure enmy* to take us with (86-66)/For *hym may na man fele* in joy and swetnes (103-23)/Mikel *lufe and joy sal þou fele* (108-16)

その他 95-15(代-複), 100-128(代-複), 105-28(代), 109-38(代-複), 111-91(名), 112-136(代-複), 112-138(代-複), 117-15(名-複)。

§10 非人称動詞の与格目的語は動詞に先行するのが通常だが、他にも目的語が他動詞に先行して主語との間に挟まれる場合が4例ある。従来の調査には、ごく少数の割合では見られたが、このテキストに見られる2例は、調査対象の量から言えばその比率は大きい。従来の調査でも大部分そうであったが、この場合もその特長は目的語が否定詞かまたはそれが付随していて強調されていることである。残りの2例はパラグラフの初めの部分に見られる抽象的命題で対句法をなしているが、目的語に付随する数詞が強調されると共に、後位にある動詞に不自然な重みを感じられる。

A : and forþi *þai wyl na counsell have* of oper þat es better (86-39)

/For when men hase feled oght of pat savoure, þe mare þai have þe mare þai covayte ; and he þat *noght* feled, noght he desires (114-219) oght との対句関係によるものと考えられる。

B : Clennes of hert *thre thynges kepes* (100-18) これに続く同じパラグラフ内での対句になるものは通常の語順である。Alswa clennes of mouth *kepes thre thynges* (100-123)/Clennes of werk *thre thynges keps.* (101-145) これと第1例とが対句になっている。

なお §3 の例文 第3例も動詞に先行する目的語の例としてここに入る (The thar noght tell *all þe soþ ay*, bot if þow will ; bot *al lees* hate (100-135)。そして na と同様絶対的な意味を持つ al がついて目的語を修飾していること、先行の *all þe soþ* と対句をなしている点も同じである。

§11 副詞句が頭位に来る40例⁽³⁾の内、転倒語順は18, 非転倒は22であり, 45%の転倒率がある。§9と同様に要素に分析し, 語順で区分すると：

Non-Inversion	Inversion
Pron + Vi4	Vi + Pron3
N + Vi4	Vi + N7
Pron + Vt2	Vt + Pron1
N + Vt2	Vt + N1
Pron + vV8	V + Pron + V...2

- (3) ただし次の場合, 副動詞句は pat 以下の節に属しており, この文の主語は pat の節であるから, ここには含めない。In þe *whilk luf* þat þou wax ay mare and mare *es* my covaytyng and my amonestyng (96-9). 又, Fra þou have getyn þis lyfe, all þi luf, til dede come, *es* joy and comforth (113-185) も転倒例として処理してよいかも知れないが, come までの主部と考えることも可能であるから含めなかった。

なお all þi *luf* (=love) は all þi *lyf* (=life) であろう。今写本などで確める手段を持たないが, このテキストで life の意味では þi lyf (89-19), þi lyf (95-18), in gode lyf (85-27) などあり, luf は常に love のことである。

N + vV2

V + N+V4

これによると、全体としては頭位に副詞句のある場合、非転倒への傾きがやや大きいことは今述べた通りであるが、単一動詞の場合、非転倒・転倒の比率は同じであること、複合動詞の場合は63%弱が非転倒であって転倒しにくいこと、主語別に見ると単一動詞で代名詞の場合は60%非転倒に向い、名詞の場合は43%弱が非転倒に向う、と逆の傾向を示す、つまり名詞主語と単一動詞では転倒しやすいこと、複合動詞においては、代名詞主語の場合80%非転倒へ、名詞主語では67%が逆に転倒へ向うこと、つまりここでも単一動詞のときと同様名詞主語のあるときは転倒しやすいこと、次に単一動詞の機能別によれば、自動詞の場合55%強で転倒に傾くが、他動詞では66%強で非転倒に傾く、つまり自動詞では転倒しやすく、他動詞ではそうでないこと、最後に自動詞で代名詞主語の場合の語順対比（58%対42%）はあまり変らないがやや転倒しにくく、名詞の場合は63%強で遂に転倒へ傾き、他動詞では代名詞主語、名詞主語共に（66%対34%）余り変らないが、どちらのときもやや転倒しにくい、ことがわかる。つまり、転倒の起こりやすいのは複合動詞よりは単一動詞の場合、主語については動詞に関係なく言えば代名詞よりは名詞の場合、単一動詞については他動詞よりは自動詞の場合、ということになる。

A : and *in adversitee þai grotche* (115-240)/Withouten þat, na man may pay god ; *with þat na man synnes* (110-51)/When *under þe lyknes of gastly gode he entices* us til scharp...penance (91-89)/ *With þier seven gyftes þe Haly Gaste touches* sere men serely (116-7)/*on all maner scho suld se hyr* (91-68)/Withouten þat, na man may pay God (110-50)

その他87-99(代-複), 89-141(名-他), 89-9(代-複), 94-34(代-他), 95-9(代-複), 96-7(代-複), 101-169(代-自), 103-16(名-自), 106-53(名-複), 107-18(代-複), 110-65(代-自), 113-154(代-複), 113-162(代-複), 114-205(名-自), 117-19(名-自), 118-49(代-自)。

B: *Of þat maner of syngyng speke I noght* (106-67)/*In þis gyft schynes contemplacion* (116-21)/*Pyte es, þat a man be mylde, and agayne-say noght haly writte when it smytes his synnes...*; *bot in al his myghte purge he þe vilete of syn in hym and in other* (117-23)/*In þus many maners towches þe ymage of dremes men when þai slepe* (93-133)/*In soverayn rest sal þai be, þat may gete it* (106-78)/*On þis maner sal þi lufe be insuperabel* (105-13)

その他 85-2(自-名), 91-74(自-代), 100-129(複-代), 102-192(自-代), 102-204(複-名), 107-83(自-名), 107-83(自-名), 107-84(自-名), 107-85(自-名), 108-20(自-代), 110-62(複-名), 112-133(複-名)。

否定詞を含む副詞句が文頭にあっても転倒語順をとらないことがある。従属節にあること、助動詞のない仮定法動詞であること、に理由があると思える。

for schame never sithen come he at hir(91-74)/*In na thyng may men sonar overcom þe devil* (112-133)/*he sal sa schyne in vertues, þat in na parte of hym he be myrke in vices* (110-65) cf. *It es swa mykel, þat als in hel myght na thyng lyve for mykel pyne...* (102-204) 及び B第2例の *þat a man be mylde...*。

また名詞主語・自動詞で転倒の起こる例は、前置詞＋関係詞という副詞句の内容を持つ語群に続く節内でも見られる。

al gastly strength comes of mekenes, on wham restes þe Haly Gast in a meke sawle. (111-104)/*til þe lovyng of god, of wham es all gudeness* (100-141)

cf. *bot þai se noght oure hert, whare owre solace es* (89-16)/*þe heghest place in heven, right til þi spows, þare he syttes in hy blys* (95-8)。

§12 Then が頭位に来る場合が23例、内75%が非転倒であり、転倒の語順

をとるのはわずかに6例(25%)にすぎない。これは著しく近代語の様相が出ており従来の調査(cf.§1)とは全く逆であることに注目したい。

§9, §11と同様、要素に分析し、語順により対比してみると：

Non-Inversion	Inversion
Pron+Vi ……4	Vi+Pron……1
N +Vi ……5	Vi+ N ……1
Pron+Vt ……4	Vt+Pron ……0
N +Vt ……3	Vt+ N ……0
Pron+vV……1	v +Pron+V…4
N +vV……0	v + N +V…0

全体としての傾向はさきに述べたが、動詞別に見ると、自動詞では81%が非転倒となり転倒しにくいこと、他動詞では100%非転倒であること、複合動詞では80%が逆に転倒に傾く、つまり単一動詞なら88%の非転倒で非常に転倒しにくく、複合動詞ではその逆に転倒しやすいということになる。主語別に見れば代名詞の場合自動詞で80%、他動詞で100%、名詞のとき自動詞83%弱、他動詞で100%非転倒に傾き、複合動詞の場合、名詞については例文を欠くから判定できないが、代名詞では80%が逆に転倒へ向っている。つまり自動詞で代名詞主語の方が3%の僅差で転倒しやすいことになるが、大差はない。また複合動詞は対比する名詞主語の例を欠くから、かなりの差でもって代名詞になった場合のみ転倒するということである。

更に付け加えると、例文第3に見るように、わずらわしい程連鎖的に同じ *pan*+主語+動詞の型が続くが、結論部に近くなると転倒が起こる。これは話を次ぎ次ぎに進めて積み重ねている場合は非転倒語順であって論理的単調を示すが、大切な結末部で語順を変えているのは、修辭的意図が濃厚であり、単調さを破って強く印象付けようということであろう。

Den many begynnnes þe thyng þat þai may never mare bryng till ende ;
þen þai wene þat þai may do what so (87-68~70)/And þan þou comes

intil swilk rest (113-180)/*þan þi sawle es Jhesu lufand, Jhesu thynk-
and, Jhesu desirand, anly in þe covaytes of hym anedande, til hym
syngand, of hym byrnand, in hym restand. þan þe sange of lovyng
and of lufe es commen, þan þi thoght turnes intil sang and intil
melody, þan þe behoves syng þe psalmes þat þou before sayde, þan
þou mon be lang abowte fewe psalmes, þan þe will thynk þe deed
swettar þan hany, for þan þou ert ful syker to se hym þat þou lufes;
þan may þou hardely say: 'I languysch for lufe'; þan may þou say:
'I slepe, and my hert wakes.'* (105-42~106-52)/I knawe þat þi lufe
es gyven to þe servyce of God. *þan es it schame til þe, bot if þou be
als gode...*(93-2)/and *þan es drede* perfyte in us and haly, when we
drede to wreth God (117-30)

その他 90-25 (名-他), 90-29 (代-他), 92-106 (代-自), 93-127 (名-他),
111-82 (代-他), 119-57 (代-他), 119-65 (名-自), 109-21 (代-自), 109-27
(名-他)/96-14 (複-代), 118-45 (複-代)。

§13 There が Preparatory 'there' である場合の語順は近代語に同じであ
る。主語が強調されて文頭に出ても *there+be* の順は崩れない。

þare hase bene many, and er, þat wenes(87-94)/Other many *syns þar
er* of omission (99-77)/Twa *lyves þar er* þat Cristen men lufes. (117-
1) 2 例とも主語に数詞を持ち強調されている。

その他 90-20, 93-125, 110-51, etc.

次のような *where* と *correlative* に用いられた対句法も目につく。

For *whare many dremes er, þare er many vanitees* (93-138)/For
whare sa covaitise es, þare es na lufe of Cryste (114-212)

また *there* を用いないで「存在」を表わす *be+主語* の語順が、副詞句が文頭
に来るときに見られるのは近代語に同じだが、主語+*be* の型もある。

Alsswa, seven *experiments* *er*, pat a man be in charite. (114-212)/
Twa er, pat na man...may eschape (93-125)

§14 Forþi が頭位に来る10例の内3例に転倒が見られる。この3例の特長は、主語に引用文の典拠となる権威ある人物が置かれ (cf. 最後の例文), 動詞は常に他動詞 *say* の単一動詞である点で、ひとつの固定した語順と考えられる。従来の調査でも *as*, *therefore* が頭位に来て, *as* (*therefore*) *says* *the prophet* の転倒語順をとることは *Gesta Romanorum* で特に著しかったのを思い出すことができる。非転倒7例の要素は代-自…2, 代-他…2, 名-他…1, 代-複…2である。

A : *Forþi says þe wyse man*, pat many besynes folowes dremes (92-122)/*Forþi sayde þe prophete* : ‘He hase calde þe tyme agayn me,’ (95-30)/*Forþi says saint Paule* : ‘……’ (107-14)

B : *Forþi it es* noght gode to pyne us (87-92)/and *forþi þai wyll* na counsell *have* of oþer (86-39)/*Forþi þai may say* : ‘I languysch for lufe.’ (106-59)

その他88-118(代-他), 86-59(代-他), 103-14(名-他), 117-7(代-自)。

§15 *Oft* (*siþe*) の例は4, 内1に転倒語順がある。主語は4例共全部代名詞, 複合動詞は後者だけで他は自動詞2, 他動詞1である。*umwhile* (= *some-times*) 1例は非転倒である。

A : For if pou have broken it..., the es reft appetyte of mete, and *oft sal pou be* in quathes (101-166) 先行する *the es reft* の語順の影響も考えられる。

B : Bat *oft thai fall* or þai come (87-71)/For *oftsiþe þai say* pat he or scho es in... (88-116)/Also *umwhile þe fende* tempes men and women (90-51)

その他87-96(代-自)。

§16 *Partill* の1例は転倒語順である。代名詞主語、複合動詞であるが、先行の文の語順の影響も考えられよう。

For hym may na man fele..., bot if pai be clene and fylled with his lufe ; and *partill* sal pou come with...(103-25)

§17 *Parfore*と同じ意味を持つ *wharfore* の2例は転倒語順を起こさないが、前者では3例中2例がそうである。例文に見るように、共に否定詞を伴い *bot if* (=unless) や *bot when* (=except when) との連関があることに注目したい。他-代、自-代一つずつで、非転倒は代-複である。

A : Bot if a man gyf almose-dede, and take..., it es signe þat he lufes god ; bot *parfore lufes he* hym noght, *bot when* he forsakes þe worlde only for goddes lufe (110-70)/Bot *parfore* peraventure *es it* noght þe best..., *bot if* he war disposed als I was in his sawle (116-266)

B : Bot never-þe-latter *parfore I* sal noght *lette* þat I ne sall schew my wytt (108-6)/*Wherefore scho* was right glad (91-5)/*Wharfore luf* es in will verrailly (111-93)

§18 *Now* は4例全部に転倒語順がある。代名詞主語、複合動詞である。

Now may pou se þat...(94-37)/*Now hase* pou herd how pou may...(102-213)

その102-213, 108-1, 113-167。

§19 *Else*の3例中転倒は1例のみで、代名詞主語、複合動詞である。代-他、名-自が非転倒の場合の要素である。なお同じ意味の *or* (接続詞) は要素が *else*

の転倒例と同じであるのに転倒はしていない。従属節にあることもその理由かも知れない。

A : or *els may þai drede* þe malysoun (118-32)

B : Forthi loke wele þat þi thoght be in god, or *elles þou dampnes* þiselfe (111-86)/He saw þat hym behoved outhur do hir wyll, or *scho walde despyse* hym. (91-70) /say all þat þow wate ill ane, or *els þi schryft es* noght worth(100-111)

§20 Þarof の 1 例は、名詞主語、自動詞で転倒している。

Begynne we at counsel, for *þarof es* maste *nede* at þe begynnnyng (116-5)

§21 Unnethe(s) は代-自、名-自、名-複の要素で 3 例共転倒語順になっている。

Ane es : þe messur of þi luf here, þat sa schort es, þat *unnethes es* it oght (95-19)/þai grotche… in swa…þat *unneth may* any *man* comforth þam (115-241)/In þe fyrst degre er many, in þe toþer degre er ful faa, bot in þe thyrd degre *unnethes er many* (107-85) この例では先行する転倒語順との対句法になっているし、*unuethe*s には転倒を起こす力が少なくむしろ *many* を修飾しているとも考えられる。

§22 Yet の 1 例は転倒語順であって、代名詞主語、自動詞である。

Blyssed es he or scho þat es in þis degre ; bot *zitt er þai* blyssedar, þat myght halde þis degre (105-15)

§23 Als は als…als と correlative に用いられる場合の文末に、修辞効果を狙ったと思える主節で 1 例に転倒が見られるだけである。従来の調査では as

says the prophet (cf. §14) や *als* + 代動詞 (*do*) + 名詞の転倒語順が頻繁に見られたが、このテキストでは当然予想される場合にもそうならない。近代語順に近いものである。

A : and *als* many gode dedys *als* we do, *als*..., and *als* many..., *als* many paces *ga we* till hevenward. (87-76)

B : For *als* mykel *þai forsake*...*als* *þai may covayte* (94-19)/*Als* tyte he broght forth *þe fayrest woman*...And *als* tyte al vanyst away (91-73) この2例はAの例と対照である/*als þou dyd wakand* (105-26)/*als þe yren or þe cole dose in þe fyre* (110-57)/For *als Austyne says*, '...' (115-229)

その他88-133, 86-52, etc.

§24 So が頭位に来るときの転倒例は3件で、内2は「…もまた」の意味を持ちBの第1例に見る1件を除いて、近代語と同じであるが、他の1はAの第3例に見るように「結果」を表わすもので、同種の So を頭位に持ち、非転倒語順をとる5例の中の例外である。動詞 *sclaunder* の強調が *swa* との頭韻効果と共に語順によってあげられていると言えよう。*als* と correlative に用いられた So 1例 (名-自) は主語の修飾句が長いためか転倒していない。

A : *þou dose well* ; for *sa dyd Criste* hymseef and hys *apostels* (101-159)/Bot som er, *þat lufes noght wysely*, like til barnes, *þat lufes mare an appel þan a castel*. *Swa dose many* : *þai gyf þe joy of heven for a litel delyte of þar flesche* (113-165) /in adversitee *þai grotche*, and falles in *swa mykel sarynes*,...; and *swa sclaunder þai* God, flytand and feghtand agayne his domes (115-242)

B : In *þe fyrst degre* er men lickned to *þe sternes* ; in *þe toper*, till *þe mone* ; in *þe thyrd*, til *þe sonne*. Forþi says saint Paule : 'Other of *þe sonne*...' : *swa it es* of *þe lufers of god*. (107-90)/*als*..., *swa* pe

joy in þe syght of Jhesu in his Godhede es swa mykel þat... (102-205)
als と correlative になっている。/*Þan he lufes God, and þat luf es in his saule, and sa his dedes sehewes withouten* (111-83)

その他85-11(代-自), 86-66(代-他), 89-145(代-自), 91-55(代-他)。

ここで全体を語順により区分すると：

Non-Inversion	Inversion
N + do.....0	do + N2
Pron+ Vi.....3	Vi + Pron.....0
N + Vi.....2	Vi + N0
Pron+ Vt.....2	Vt+ Pron.....1
N + Vt.....0	Vt+ N0

代名詞主語，他動詞の場合66%非転倒語順をとることになる。

なお So が強調に利用されて頭位にきたため転倒の語順が見られる例が1件ある。しかし同じような働きの so でも非転倒のことが1件あるし，so 以外の副詞で強調の役割を果している場合も転倒を起こしていないことがある (cf. *mare prilyer* (91-79), *Wonderfulli* (94-28), *Sothely* (95-20))。

A : And *sa* mykel *es he* þe wer, þat he wate noght þat he es yll (86-53)

B : Bot *so* mykell *we sall* latlyer *gyf* fayth till any dreame, þat we may nat sone wyt whilk es soth (93-134)

§25 Bot(=unless) 節 (cf. §17) があって対句法をなす場合に次のように転倒する場合が1例ある。

Stalworthly may na man lufe hym, bot he be stalworth. (111-102)

§26 文頭強調の so と同じく強調に用いられて転倒となる副詞が2例ある。いずれ If の節に続く主節の頭位にあり，内ひとつには bot (=unless) が後に来る (cf. §25)。

If pou saw a man have preciouſe ſtanes, þat he myght by a kyngdon with, if he gaf þam for an appyl, als a barne will do, ryghtwysly moght pou ſay þat he war noght wyſe, bot a grete fole. (112-147)/If we waſte it in erthly lufe and in vanitees, ful grevosly mon we be demed and punyſt, for þat es ane of þe maſte ſorow þat may be, bot we afforce us manly in þe lufe of God, and do gude till al þat we may, whil oure ſchort tyme laſtes (95-34)

§27 これまでに述べた副詞（句）以外で頭位に来るものがあるが転倒語順を起こしていない。各語について代表的な頁，行数を挙げる。

sone(90-34), noght-forþi-þan(90-39), *umwhile(90-51), *wharfore(91-61), never-þe-latter(91-5), *mare privilyer(91-79), comonli(91-79), alsswa(92-105), *wonderfulli(94-28), *sothely(95-20), noght forþi(114-200)

星印のついた語（句）についてはすでに付随的に述べている。noght-forþi-þam, never-þe-latter, noght forþi については §22 yet と考え合わせることが出来るし，alsswa は §24 so の「もまた」の例と対比させ得る。

§28 分詞が頭位に来ていてほぼ同じ条件であり乍ら対照的な語順の起こる2例がある。

A : For *sittand am I* in maſte reſte, and my hert maſte upwarde.
(116-265)

B : *Wakand þai er* umwhile tempyd with foule thoghtys(90-43)

§29 接続詞 *ne, than* の導く節で代動詞＋名詞主語，また複合動詞のある場合，従来の調査では少数だが転倒が見られたのに，このテキストでは一切見られない。

þai may nouthur ſtand agaynes..., *ne þai may lyft þair will to...*(85-

6)/þe whilk syght sall be mare þan any may tell (96-47)/pow...
knaues better þiself and God þan þou dyd (101-174)

§30 the+比較級が相関的に用いられる6例中、従属節ではすべて非転倒であるが、主節においては、頭位に the+比較級+対格目的語の来る3例を除けば (cf. §9) 残りは転倒語順をとる。

A : Bot sa mykel þe mare þat he es siker of lufe, *will he be* bisy to lufe (114-207)/For ay þe *ma* temptacions, and þe *grevoser*, þai stande agayne and overcomes, þe mare *sall* þai joy in his luf (90-42)/For ay þe *better* þou ert, and þe *les* speche þou has of men, þe mare *es* þi joy before God (88-107)

B : for ay þe mare þat þe perfeccion es, þe *facr folowers* it has (107-85)

その他87-97(代-他), 114-218(代-他)。

§31 前置詞、副詞(句)について上記以外に気付くことは、韻文におけるような古風な配置や対句法を主とした技巧 (cf. §§8, 10) が見られることであり、副詞(句)の場合特に目立つのは現在分詞や動名詞の前に連続的に置かれているのが見られることである⁽⁴⁾。また従属節にしばしば副詞(句)を動詞に前置し、動詞後位としていることも注目してよい。

A : Piere wrechednes, þat I *have of tolde*, er noght anely in worldy men (85-24)

B : On þis maner sal þi lufe be insuperabel, þat na thyng may *downe*

(4) Basil Cottle: The Triumph of English 1350-1400, Blandford, 1969, もp. 251で, Clanvowe の文体に言及して 'There is little of the crudity—found at its worst in the early fourteenth-century mystic Rolle—of rhyming jingles in strings of present participles or verbal nouns' と Rolle を引き合いに出している。

brynge (105-14)/*pat þe thynk þat þou may never be fra hym departyd* (113-180)/*þe benyson on domesday, þat Jhesu sal til al gyf þat dose þam* (118-32)/*þow hase now herd a party how þe fend deceyves, wyth sotell craftes and whaynt, men and women.* (88-130)/*I wate wele þat þou mon wax gretely...*, and *mikel fele* of delyte (104-50)/*Pan þi sawle es Jhesu lufand, Jhesu thynkand, Jhesu desirand, anly in þe covaytes of hym anedande, til hym syngand, of hym byrnand, in hym restand.* (105-42)/*Also men and women þat maste has of Goddes lufe*(103-17)/*For he þat mykel lufes, hym lyst oft syng* (103-3)/*so þat he myght susten Goddys servys till his dede day, and naght in a litill and in a schort tyme waste it, and þan lygge wanand and granand be þe wall* (87-84)/*Na man till swyلك revelacion and grace on þe first day may kom, bot thurgh lang travell and bysines to loue Jhesu Criste* (90-36)/*if þou lat þi hert any tyme be ydell* (97-12)/*þe thyrd, þat þou for na thyng, ne for na mekenes, lye on any man* (100-131)

また副詞句には本来その属すべき条件節の外で Extra-positionをとることがある。先行の句とは対句になっている。

For it hase joy in Goddes lufe, and savowre in þe lyf þat lastes ay, in þis present tyme if it be right ledde (117-9)

§32 形容詞の配置も均衡を意図して修辭的なものも多くある。

gif joy endles for a litell joy of þis life (85-13) cf. *seke þe joy lastande* (85-31)/*in pyne and penance grete*(89-12)/*and þe ma tempacions, and þe grevoser, þai stand agayne* (90-40)/*a febyll man and a fleschly* (108-5)/*it es in mare swetnes gastely*(117-3)/*of þi riche kynne or of gentyle* (97-31)/*waker thoght and stabel of God* (110-119)/*honest ocupacion and prophetabyll* (100-122)/*with hys sotell craftes and whaynt* (88-

§33 §11の注(3)にもあげたが、次の場合も処理に問題が残るようである。

For whare sa covaytyse es, þare es na lufe of Cryste; þan if he have
na covaytyse, *signe es* þat he hase lufe (114-216) cf. Bot if a man gyf
almoſe-dede, and take hym til povert, and do penance, *it es signe* þat
he lufes God; ... (110-77)

この2例は全く同じと言ってよい文脈であるが、前者を後者のような主語
it を欠く転倒例のひとつと見るか、非人称動詞 es の主語を欠いたものとする
か、少し無理なようだが *signe* を主語ととるか、で扱いが異なるであろう。

§34 限られた資料であるが、上の記述によってここに述べる 必要があるの
は、感嘆文、間接疑問節、as, than のあとに転倒語順の現われる割合が皆無か
または僅少に留まっていることもさき乍ら、then に続く転倒語順の割合 (25%)
が従来の調査結果 (特に Chaucer 約90%) に比して遥かに少ないことであろう。
文体的性格に起因することであろうが、これは、上記のいくつかの特長と共に、
近代化しつつある統語法の証拠と見てよいであろう。

もうひとつは、文体的意識が旺盛なため、補語や目的語、副詞や前置詞の、
特に従属節に多い、動詞に先行する語順のことである。これらの手段は、しか
し通常の語順の大勢を左右するものではないだけに、より修辭的効果を挙げて
いると言えよう。

最後に転倒語順の条件を総合的に見ることにするが、ほぼ固定した語順と思
われるものを除いて転倒率を要素または Verb-Subject cluster 別に列記する
と：

Head Position	Elements of Subject-Verb Cluster	Percentage
§ 9 Accusative Object	Vt+N	66
	Vt+Pron	13

	v + N + Vt	75
	v + Pron + Vt	55
§11 Adv. Phrase	Vi	55
	Vt	34
	N	63
	Pron	42
	v + N + V	67
	v + Pron + V	20
§12 Then	Vi	19
	Vt	0
	N	?
	Pron	68
	v + N + V	?
	v + Pron + V	80
§15 Oft(sithe)	v + Pron + V	100
§11 Prep. + Relative	Vi + N	100
§16 Theretill	v + Pron + V	100
§17 Therefore	Vi + Pron	100
	Vt + Pron	100
§18 Now	v + Pron + V	100
§19 Else	v + Pron + V	100
§20 Thereof	Vi + N	100
§21 Unnethe(s)	Vi + Pron	100
	Vi + N	100
	v + N + V	100
§22 Yet	Vi + Pron	100
§23 (Correlative) As	Vi + Pron	100

§24	So	do + N	100
		Vt + Pron	34
§24	(Emphatic) So	Vi + Pron	100
§25	Stalwortly	v + Pron + V	100
§26	Righteously	v + Pron + V	100
§26	Ful	v + Pron + V	100
§28	Participle	Vi + Pron	50
§30	the + Comparative	Vi + N	100
		v + Pron + V	100

最初の三つの Head word は件数が多いので別にその転倒語順となる条件を見ると：

(1) 対格目的語 + Vt + 名詞

対格目的語 + v + 名詞 + Vt

(2) 副詞句 + 自動詞 + 名詞

副詞句 + v + 名詞 + V

(3) Then + 自動詞 + 代名詞

Then + v + 代名詞(?)⁽⁵⁾ + V

つまり(1)(2)と(3)には明瞭な差がある。即ち前者では単一動詞の場合も複合動詞の場合も、名詞主語のときに転倒する傾向があるが、(3)では少なくとも単一動詞の場合においても、代名詞主語でその傾向が出る、という点である。

四番目以下から、§§24, 28 及び §30は頭位の語句や動詞において条件が異なるから一応除き、他をまとめると、

転倒の条件は：

副詞 + 自動詞 + 名詞…………… 3

副詞 + 他動詞 + 名詞…………… 0

(5) 複合動詞と名詞よりなる Cluster は見出されないから主語について代名詞と対比するには疑問の余地がある。

副詞＋自動詞＋代名詞…… 5

副詞＋他動詞＋代名詞…… 1

副詞＋v＋代名詞＋V …… 7

副詞＋v＋名詞＋V …… 1

なお、これに Soの項の do＋名詞（自動詞＋名詞と考えてよい）や他動詞＋代名詞の率また分詞の項の自動詞＋代名詞，代名詞＋自動詞の率を参考にすれば，このテキストにおける転倒条件は(1)(2)の場合はそのままよく，単独副詞が頭位に来る場合の転倒条件も結局(3)の単独副詞 Then の項と同じであると言えるのである。

以上のほかに，彼の修辞法と関連する語順の在り方については更に詳しく調べる機会を持ちたいと思う。

